



気になるあいつ
わかぎゑふ

双葉社

普通

日本人：の中でもとりわけ大阪人は「うちの家、普通ちゃうねん」とか「俺、ちよつと変わってるから」と言うのが大好きだ。ともかく一般的でないこと、自分のオリジナルであることがステイタスである。

自分自身の考えをちゃんと持つてる事は、商売人の基本だからだろうか？ なんせ子どもの頃から「自分はどうしたいんや？」と聞かれることが多い。誕生日やクリスマスのプレゼントなどを親にねだった時に「○ちゃんも持つてるねん」なんて言ったら大変だ。

「○○ちゃん、関係ないやろう。あの子はあの子、お前は何がええねん？

誰かとお揃えやったらええとか情けないこと言うな」

と親に怒られる。

だから自然と「自分はこれが欲しい」と思う思考のはつきりした子どもが出来るのである。自分のオリジナル性が問われるので、結果的にみんな「俺は人とは違う」と思ったがり、普通じゃないことを好むわけだ。なので、どうしても大阪人は派手好みになる。中年のおばちゃん達なんて、とんでもない格好をしている。豹柄の重ね着とか、大きなバラの花の模様がついたTシャツとか、阪神タイガースにちなんだ黒と黄色のストライプのワンピースとか：なんだろう？ この人たちの服はどこで買ったんだろう？ と首をひねるようなものばかりだ。

しかし、町全体がそういう服で溢れ返ってるので、あまり気にならないわけである。売ってるものもそれを煽るような代物ばかりだし：派手な事に麻痺状態なのだ。

が：時々それが困った事になる。なんせ麻痺してるのは大阪人だけな

ので、ちょっと足を伸ばして神戸や京都に行くと、目立つのだ。

写真の2人を見ていただきたい。モヒカン頭の方が私の親友のコンダ桑田。座ってるのがうちの旦那、朝深大介。これは共通の友人の結婚式に出席するために神戸に行った時の写真だ。本人たちは最高にシツクに決めていったつもりだったが、なんせ役者であることも手伝って、まるでマフィア映画に出てくるようないでたちだった。

「あんたら派手やな」

と言うと、

「そんなことないわ。今日はめっちゃくちゃ渋く決めてきてんで。結婚式やねんから」

と言い返された。うーん…雰囲気もや、しぐさも手伝うのかもしれないが、大阪人の場合は、たとえ礼服でも、ひとつひとつの小物が派手で普通ではないので、どうしようもない。

周囲に座っていた神戸のモダンな人たちが「あれ誰？」というムードで遠巻きに見ていたが、2人はものすごく普通に決まってる気になっていた。よく見ると神戸の披露宴は黒、グレイ、ベージュ、紫系の色の服ばかり。しかも着物姿の人がいなかった。

大阪の披露宴だったら赤、ピンク、黄色、玉虫色などのドレスに目の覚めるような振袖姿の女性が目立つもののだが、さすがに神戸である。そんな中にやくざ風の男が2人。嫌でも目立ち、しかも本人たちは最高に溶け込んでる気になっている。

私は久しぶりに大阪人を傍観して見て、こうやって誤解を招くねんなあと、つくづく思った。普通の規準はなかなか深い。

【著者略歴】

わかぎさるふ

1959年、大阪府生まれ。女優、エッセイスト。1986年より作家・中島らも氏とともに劇団「リリパット・アーミー」を主宰し、現在同劇団の進化形「リリパット・アーミーⅡ」の座長。1994年より演劇ユニット「ラックシステム」を旗揚げ。演劇制作会社「玉造小劇団」を運営し、女優のみならず、脚本、演出、メイクから衣装まで芝居全般にわたりその才能を発揮し続けるスーパーレディ。主な著書に『すみっこのすみっこ』『女体の神秘』『秘密の花園』『ぬくい女』『イブの抜け穴』『大阪弁の詰め合わせ』など多数。
